

小池博史の仕事



Introducing

HIROSHI KOIKE

HIROSHI KOIKE BRIDGE PROJECT





H i r o s h i K o i k e

「小池博史」、これは一体なに？

1956年茨城県日立市生まれ→1982年パフォーミングアーツカンパニー「パパ・タラフマラ」を設立→以来、邁進に次ぐ邁進、見たことのない世界を探求→パフォーマー育成のための学校を運営→つくば舞台芸術監督他、様々な審議員・審査員等を歴任→計55作品を創作、35カ国で公演→2011.3.11を契機として2012年5月「パパ・タラフマラ」解散→同年6月小池博史ブリッジプロジェクトを設立し、世界的に多角的な活動を営みつつ現在に至る。

以上が少し調べればネット上で読むことができる演出家、小池博史の来歴です。

では35年以上にわたって創作、制作され続けてきた作品はどのようなものでしょうか。要約して言うなら、ステージ上で行われるあらゆるタイプのパフォーマンスを統合した「舞台芸術」としか括り得ない表現で、海外ではロバート・ウィルソン、日本では同時代に結成されたダム・タイプ(Dumb Type)等とある種の共通性を持ったアートの舞台表現と言っていいでしょう。小池さん自身も「演劇、舞踊、音楽、美術といった既存のジャンルでは括れない、そういう括りを超えていくところに僕らの存在意義がある」と1982年、パパ・タラフマラ設立時に語っており、演出家という立場をとる美術家、振付師、作家、音楽プロデューサー、写真家、時としては出演者でもあるアーティストだと言えます。

身体性と喜劇的要素

小池作品の特質は、80年代以降の舞台芸術の潮流の中においては、様々なテクノロジーを重視し、メディアアート型舞台の先駆的役割を果たしたとされて来ました。しかし最も特徴的なのは身体性を核に据えてこそそのメディアだということです。常にパフォーマーの「からだ」とそれが「場」に存在するという事実により最大の重きを置いての創作行為でした。つまり感情を持ち、思考する「からだ」から生み出される驚異が、舞台装置などの空間を異化しつつ、物語に劇性をもたらしてきたのです。

作品は、演劇、音楽、美術、文学、ダンス、映画、ファッションのみならず、時間、空間、歴史、民族、多言語、多文化、怒り、喜び、悲しみ、彼岸と此岸、美と醜、無と有、等々あらゆる要素を混ぜ込みながら、様々なレイヤーで構成された世界として形作られています。方法としてはこれが小池演出のスタンダードなスタイルと言えますが、それらの要素を不条理なまでに極端化し、滑稽なレベルまで引き上げ、すべての物事は滑稽であるがゆえに平等、という状態にまで世界を刷新しようとしたのが小池作品の最も重要な特性だと私は考えます。小池作品はまず「滑稽で笑えるもの」なのです。

『時間の彫刻』としての舞台

小池さんは以上のコンセプトをかなりスマートに作品化し続けてきました。でもそれはうまくやればやるほど、「これは一体何!? 演劇なの? 舞踊なの? それとも?」という戸惑いにも似た問いを高度に伴う質の表現になってしまう宿命を抱え込むことになります。

そこでひとつの見方を提案したいのです。

小池作品は『時間の彫刻』作品と捉えると実にわかりやすく、かつ面白く感じられます。そこにあるのは、時間のオブジェ、見える音楽、あるいはしゃべるダンスであり、舞台上の現象を美術的

茨城県日立市生まれ。一橋大学卒業。1982年パフォーミングアーツグループ「パパ・タラフマラ」設立。以降、全55作品の作・演出・振付を手掛ける。2012年5月解散。その後すぐに「小池博史ブリッジプロジェクト」を立ち上げ、創造性を核に創作・教育・発信を三本柱とした連携プロジェクトを展開中。アジア各地で13作品を創作。パパ・タラフマラ以外での演出作品も多数。演劇・舞踊・美術・音楽等のジャンルを超えた作品群を40ヶ国で上演。各国アーティストとの作品制作やプロデューサー作品の制作、世界各地からの演出依頼公演、プロ対象・市民対象のワークショップと創作を数多く実施。雑誌への寄稿も多い。97〜04年つくば舞台芸術監督、アジア舞台芸術家フォーラム委員長、国際交流基金特定寄附金審議委員(05年〜11年)等さまざまな審議員、審査員等を歴任。著書として「ロンググッドバイ〜パパ・タラフマラとその時代」(2011年、青幻舎刊)、「からだのこえをきく」(2013年、新潮社刊)、「新・舞台芸術論—21世紀風姿花伝」(2017年、水声社刊)。「夜と言葉と世界の果てへの旅—小池博史作品集」(2018年、水声社刊)。毎月1回、メールマガジンを発行中。

に捉えるもよし、変化のリズムを音楽的に捉えるもよし、あるいは言葉にこだわって、自分にとっての大切なメッセージとして受け取るのもよし、あらゆる回路でキャッチ可能です。いずれにせよ素直にそれを受け取れるなら、意味を超えた深淵なる領域に思いを馳せることができるのです。

作品はセリフのある演劇としての解釈も可能ですが、言葉の持つ意味は慎重、かつ丁寧に「言語」から引き剥がされています。音そのものとして舞台上で戯れさせたり、あるいはダンス的律動に翻訳されます。そしてそこから生み出されるのは、言語的愉悅はありますが、より美学としての根源性に肉薄しようとしていると感じられることが多いのです。その実践においては「戯れ」よりも高次元の精神性に支えられていると考えられます。

メソッドとしてのスロームーブメント

小池さんが長年ワークショップで実践している「スロームーブメント」は、そんな舞台作品の実戦から導かれたメソッドです。からだの動きを極度にスローダウンさせることにより、時間と空間と身体をオブジェ化し、その動きの中に生まれるコミュニケーションを通して、自身の中から新しい発見を導くワークです。

様々な表現要素をパーツ化して作品を構成する、このコンセプト自体は決して珍しいものではなく、世にそういう作品はたくさんあります。それらは演劇、映像、音楽、ダンス等、20世紀的文化を総決算する欲望に突き動かされる情動で、文化的地勢図としては欧米的なものとも言えなくもありません。小池さんの場合はどうか？ どこかそれをやり切らない、というかそれら文化を謳歌し切らないところがあり、近年は地域的にはアジア、そしてより伝統的表現や世界を注視する方向に変化することで、新しいフェーズに移行しようとしているようです。

意味を超えた多様性の沃土

2000年を経て20年弱が経過し、気がついたのは、これまで「越境」をミッションに作品を作り続けてきた小池さんが見据えた境界線は、演劇やダンスといった各ジャンルの間にあるものではなくて、20世紀と21世紀の間に引かれた境界線だったのではないかということです。それは「今まで知っている世界」と「この先の知らない世界」との間に横たわる巨大なラインだと言い換えてもいいでしょう。そのラインの延長線上に意味を超えた多様性の沃土が存在すると小池さんは信じたのだと思います。そこで制作される小池作品、あるいはワークショップ、スクールでのカリキュラムやメソッド等々、それらを観て、接して受け取れるのは、知性とイメージーションを「からだ」にきちんと備えた人間こそが、この先の世界にあって行動力を持ち、境界線を越える力を持てる、そう信じたがゆえの、一連の創造や教育や発信の行為だったと思うのです。小池さんはその大いなるヒントを探り続けて来たに違いありません。

語るべきテーマを言葉の意味から解放して、パフォーマーのダンス的な動きのフォルム、タイミング、サウンド、レイアウトに変換し、観る人の「こころ」と「からだ」に乗り移り、想像の沃土へと向かう90分の抽象的な美の時間と空間の旅。それが小池博史の舞台芸術なのです

text: 梅村昇史 デザイナー、イラストレーター (パパ・タラフマラ設立メンバー)

A R C H I V E S

Pappa Tarahumara

- 1982 「壊れもののために」
- 1983 「闇のオペラ」/「喰ふ女」/「タイポ〜5400秒の生涯」
- 1984 「1984日向で眠れ」/「黒のソーラーゲーム」/「カラズ・ダンス」
- 1985 「マリー〜青の中で」/「海辺のピクニック」
- 1986 「モンク」
- 1987 「熱の風景」/「アレッホ〜風を讃えるために」
- 1988 「海の動物園」
- 1989 「パレード」
- 1990 「新パレード」
- 1991 「ストーン・エイジ」/「パレード」イギリスツアー
- 1992 「1992パレード」/「ブッシュ・オブ・ゴースツ」
- 1993 「ブッシュ・オブ・ゴースツ」/「パレード」ドイツツアー
- 1994 「青」
- 1995 「ブッシュ・オブ・ゴースツ」ベルギー・オランダツアー /「城〜マクベス」
- 1996 「草迷宮」(パパ・タラフマラ&ズニコラボレーションプロジェクト)
- 1997 「船を見る」/「島〜Island〜」台北/「島〜No Wing Bird on the Island〜」
- 1998 「春昼」台北/「春昼」島〜Island」香港
- 1999 「島〜東へ」スウォン/「春昼」北米ツアー /「島〜Island」国内ツアー
- 2000 「WD-I Was Born」/「島&島」香港/「春昼」東南アジアツアー /「春昼〜菜の花の森から」
- 2001 「WD-I Was Born」台北、パリ/「青/ao」/「Love Letter」オーストラリア&アジアツアー /「WD-So What?」/「WD-The Sound of Future SYNC」サンフランシスコ/「WD」
- 2002 「Birds on Board」日韓コラボレーション&ツアー /「Ship in a View」ヴェネチア(※ヴェネチア・ビエンナーレ招聘公演) /「未来の空隙は響き」新国立劇場
- 2003 「青い頭の雄牛」/「Ship in a View」中南米ツアー /「ストリートオブクロコダイル計画1」 /「Birds on Board」/「クアランプールの春」クアランプール
- 2004 「ストリートオブクロコダイル計画2」/「Ship in a View」マカオ/「見えない都市の夢」 /「Ship in a View」島〜Island」アメリカツアー
- 2005 「三人姉妹」北南米ツアー、ブラジルツアー、ポーランド/「Ship in a View」ソウル /「HOG〜百年の孤独」国内ツアー
- 2006 「Ship in a View」北米ツアー /「島〜Island」ニューヨーク/「三人姉妹」/「僕の青空」 /「パパ・タラフマラのシンデレラ」
- 2007 「三人姉妹」北南米ツアー、シンガポール、東南アジアツアー、ヨーロッパ&ロシアツアー、フィラデルフィア/「トウキョウ⇄ブエノスアイレス書簡」/「Ship in a View」ニューヨーク
- 2008 「三人姉妹」インドツアー、シビウ(ルーマニア)、東アジアツアー /「新「シンデレラ」」 /「ガリバー&スウィフト-作家ジョナサン・スウィフトの猫・料理法」
- 2009 「Ship in a View」サンフランシスコ/「三人姉妹」ポートランド、ジャカルタ、東南アジアツアー、香港/「ガリババの不思議な世界」ジョグジャカルタ、ジャカルタ /「パンク・ドンキホーテ」
- 2010 「ガリバー&スウィフト」京都/「Nobody, No Body」/「Ship in a View」 /「三人姉妹」トルコツアー /「SWIFT SWEETS」東京、ソウル /「パパ・タラフマラの白雪姫」全国6都市ツアー
- 2011 「パパ・タラフマラの白雪姫」全国ツアー /「三人姉妹」全国ツアー、スイス&タイツアー
- 2012 「Ship in a View」東京/「島〜Island」/「パパ・タラフマラの白雪姫」

Hiroshi Koike Bridge Project

- 2012 「注文の多い料理店」
- 2013 「マハーバーラタ第一部」プノンペン、ハノイ、 /「注文の多い料理店」アジア6都市ツアー、国内ツアー
- 2014 「銀河鉄道」全国ツアー /「注文の多い料理店」国内ツアー /「風の又三郎」 /「注文の多い料理店」沖縄
- 2015 「マハーバーラタ第二部」アジア4都市ツアー /「幻祭前夜〜マハーバーラタより」アジア4都市ツアー
- 2016 「注文の多い料理店」全国ツアー、サンフランシスコ、ヤンゴン /「マハーバーラタ第三部」インドネシアツアー /「風の又三郎」全国ツアー
- 2017 「世界会議」/「戦いは終わった〜マハーバーラタより」アジア3都市ツアー /「注文の多い料理店」全国ツアー
- 2018 「2030年世界漂流」/「注文の多い料理店」インドツアー /「幻祭前夜2018〜マハーバーラタより」全国ツアー /「注文の多い料理店」国内ツアー /「Strawberry Fields」



是枝裕和 ●映画監督

意味に還元できない、意味を問う下品な欲求を見る者に歓喜しない何かだった。静かで深い情感に寄り添うように、そこには研ぎ澄まされた理性があった。それは肉体や汗によって生まれるものとは異質の身体表現だった。僕はそこに小池博史という人間の、肉体としての脳を観たのだと思う。そして、それは僕自身が目指している、表現の形だった。

谷川俊太郎 ●詩人

パパ・タラフマラの舞台を見ていると、そこで繰り広げられる多彩な身体の動き、声、音、言葉、光、物体などすべてが、まず一人の人間の脳髓から生まれてきていることに驚くのですが、同時にその脳髓が決して孤立したものではなく、古今東西の他の無数の脳髓ともネットワーク化していることにも気づきます。そこではいかなるクリシェの媒介もなしに、すべてがすべてのメタファーとして成り立っていて、混沌すら秩序のメタファーであり、無意味すら意味のメタファーなのだと感じさせられるのです。

ヤノベケンジ ●美術作家

初めて出会ったときから旧知の仲のように感じていて、この人となら刺し違えていくくらいの気持ちでした。最初にゲネプロを見たときは、正直涙が出て来たんです。まるで自分の人生が芝居の中で演じられているような気がしました。

天童荒太 ●小説家

舞台を体験した後は景色が違って見えた。あらゆる芸術を内包し、世界の美と混沌を丸ごと表現しようという世界唯一の集団に、私の偏狭な価値観は喜んで伸ばされてきた。

堤清二 ●公益財団法人セゾン文化財団

何処にも属さず、何物にも似ない存在者の孤独を、おそらく小池さんは誰よりも強く感じていたのではないだろうか。

森村泰昌 ●美術家

人類が二足歩行を始めたころ、知ったであろう体の「動き」。「鳴き声」が「言葉」になった瞬間。歴史が始まる前の「物語」。類人猿は知らなかったであろう「愛と性」の優雅と猥雑。私がパパ・タラフマラに感じるのは、そういった、なんというか、何百万年も前にあったはずの、物事の生成する場に対する深い想いである。それは現代的というよりもむしろ神話的でさえある。そして神話は、流行とは無縁なので古びることがない。

山下洋輔 ●音楽家、ピアニスト

胸騒ぎを感じた。これは一体何か。無言芝居、舞踊、パントマイム、動く抽象画、SF劇、運動ゲーム、ハナモゲラ歌曲、超越ディスコミュージック、動く現代歌劇。そのすべてであり、そのすべてではない。

葛西薫 ●アートディレクター

人体はただの管であることを想像する、それは僕にとっては大きな救いであり慰めとなる。

容姿のまるで揃わない男女がひとつの波のうねりようになり、それが砕け散ったように喚き散らす各人の形相を見た時に、なんだか決まって泣けてしまうのはなんなのだろうか。

港千尋 ●写真家・著述家

目指すのは未知なる感性の大陸。挑発する肉体、躍動する精神の軌跡は、既に来るべき処女航海へと私たちを誘っている。

村井健 ●演劇評論家

演劇でもない、ダンス、音楽、体操、美術でもない。「……でもない」ということはそのどれをも必須の要素として持っている「……でもある」存在だ。言い換えれば「鶴」的存在。実は近代日本人が最も理解し難い存在なのである。

坂手洋二 ●劇作家

小池さんは身体性の欠如したものが殆どに見える昨今の演劇とは一線を画したいお考えのようだ。しかし私にとっては観客が「俳優が感じていること」に「立ち会う」「共に感じる」ことが演劇の中心にあると考えるので、小池作品は「演劇」の王道にあるとあらためて思った。「ジャンル分け」自体はどうでもいいのだ。

中沢新一 ●芸術文化人類学者

21世紀に何が残るかといったら、一つは神話的というか、ある特殊な空間の作り方と、もう一つは趣味、この二つだけじゃないですか。小池さんたちがやっているのは、そういう大きな神話的空間を作る試みの中の一つなんだな。

ポール・ドレッシャー ●音楽家

小池博史の作品にはいつもひらめきと驚きを与えられる。それはダンスなのか、演劇なのか、オペラなのか?それは問題ではない。今までの古い表現形式を追いやり、新しい表現形態を目指している。そしてそれは伝統的な規則から一線を画している。だからこそ私は大好きだ。それから、これからの表現の未来は明るいと私が信じる、何か新しいもの、感心させられるものを作り出す。

世界シリーズ

世界会議、2030世界漂流、 2042世界望郷の旅、2056火の鳥が来る

肉体と肉声に照明、音楽、全てが高度で緻密。頭の中で理屈が崩壊して、
すこぶるプリミティブに想像が爆発します。

30年前にフィリップ・ジャンティ・カンパニーを観て以来の感動。

——松尾貴史氏(『2030世界漂流』感想)

素晴らしかった。なにより生々しく、そして想像力を喚起してくれる。

13人と3人のミュージシャンは、ねずみのように地を這い踊り回り、叫び、歌う。

世界が悲惨でも、コメディでなくっちゃね。出来合いの、芝居もダンスもここにはない。

得体のしれない、はみ出しは、現実であった。感動したのは、この世界は、

エンドレスだということを強く感じさせてくれたこと。じつに素晴らしい舞台、演出だった。

——後藤繁雄氏(『2030世界漂流』感想)

現代・近未来の世界を 生きる人々

「マハーバーラタ」シリーズと対になる作品群として、過去の偉人
や近未来世界といった視点から現代社会を見つめる。第一弾の2017年『世界会議』では「世界の行く末について論じる対話」をテーマに、歴史上の人物を登場人物に据え、彼らが現在の社会をどう見るかという視点を描いた。2018年の第二弾『2030世界漂流』では「難民問題」を取り上げ、世界を追われて彷徨う人々が漂流する近未来世界を独自の世界観で表現。オリジナル作品群として、前途の二作品のほか、『2042世界望郷の旅』『2056 火の鳥が来る』を制作する。

現代の世界を捉える

世界は多くの問題を抱えながら時代は逆行し、掲げたはずの理想社会からかけ離れていく現代社会。テクノロジーの発展で世界は狭くなる一方で、世界にはたくさんの壁があると実感する状況である。私たちににとっての幸福とは何なのか、実現可能なのか。根源的な人間の問題を扱い、その視点から世界を見つめるシリーズ。

現在、世界各地において同様の問題が起こっている状況を踏まえながら、音楽と舞台上の表現を通して人々に問いかける作品群。

「解説」するのではなく、全体的に感じる舞台

対話や会議をテーマとするにせよ、言葉は少なく、身体言語、空間言語、時間言語のミクスチャーによる言語を用いることで、舞台芸術としてしか成立し得ない言語構築を試みている。映像と身体がリンクし、イメージの展示会のような展開から全体の方向性を示す演出法。動きと舞踊と断片的ことばが散りばめられ、映像、美術、さまざまな音が渾然一体かするなかで、世界の本質、根源性を探り出そうとする。音楽家含め様々なジャンルのバックグラウンドを持つ出演者を集結させ、多様な表現方法を駆使することで、世界中にはびこる問題意識を観客とより深く、感覚的に共有することをめざす。



今がこの世の境界線

小池博史ブリッジプロジェクトが2013年から2020年までの8年間計画で挑む、インド古代叙事詩「マハーバーラタ」の全編舞台作品化計画。アジア圏全体の共通・共同意識を形成するため、もっとも親和性のある叙事詩「マハーバーラタ」を「交流」の核に据えて、アジア8カ国出身のアーティストとコラボレーションによってアジア各地で作品を制作。カンボジア・ベトナム・インド・マレーシア・タイ・中国・フィリピン・インドネシア・日本など、大絶賛で迎えられてきた。4部構成で上演されてきたこの作品を統合し、2020年に全編を制作予定。

アジア8カ国出身アーティストとのコラボレーション

競争と支配の原理ではなく、「共存と循環」というアジア的思考、感性がこれから間違いなく表舞台にのぼるだろう。太古の昔より、アジア諸国は海陸両方のシルクロードを通じて結びつき、異国の文化を受け入れながら、独自の文化を生み出してきた。その交流を再度、意識的に行いながら、我々の異質性と同質性から融和を生み出そうとするのが「マハーバーラタ」プロジェクトの一つの目的である。古き知恵の再認識と新しい思想の獲得を図るため、アジア各地のアーティストとのコラボレーションで作品創作を行なっている。

古代叙事詩から現代を読み解く

インド発祥の大叙事詩「マハーバーラタ」では、差別、対立、欲望、嫉妬など、生の苦しみを描き、神々の子孫として生を受けた者たちでさえ破滅、崩壊へと向かってしまう愚かさが描かれている。2つの部族間の対立を巡るこのストーリーは、人類が歩んできた争いの歴史の物語とも言い換えられよう。世界中が極右化してテロが頻発する現代世界は「マハーバーラタ」で描かれた状況をなぞっているか見えなくもない。この状況下において、私たちはいかに生きるべきかを問いかける。

「マハーバーラタ」シリーズ 第1章〜第4章

小池さんは非常に古いものを現代に生かすことに成功しています。今後30年、ひよっとしたらそれよりも遙か先まで、この「マハーバーラタ」を超える作品は生まれなないかもしれません。その意味でも、この芝居は大変な傑作だと思っています。
—アレックス・カー氏



動物・死者・ 自然の視点から見る「人間」

2011年の東日本大震災をきっかけとして、2012年より「小池博史ブリッジプロジェクト」が制作を進めてきた宮沢賢治シリーズ。「動物」の視点に焦点をあてた「注文の多い料理店」、「死者」の視点から創り上げた「銀河鉄道」、風の精たちを通して自然と人との関係を描いた「風の又三郎」の三作品を創作。自然や動物についての哲学的な考察が多く含まれる宮沢賢治の童話をベースに、「3・11」後の世界を見つめ直す作品として、子供から大人まで様々な観客層に向けた舞台である。

人間中心主義の世界観を揺さぶる童話的舞台

宮沢賢治は自然について深く考察しつつ、童話や詩を残した人物として知られている。小池博史ブリッジプロジェクト版「注文の多い料理店」では、3名の出演者が仮面を駆使して人間であるハンターと獣とを行き来しながら、人間と動物を等価な立場にいるものとして描き出す。「銀河鉄道」では死者と生者という異界の視点、「風の又三郎」では大地や風といった自然そのものの視点から、人間とはなにか、ヒトはどこから来てどこへ行くのか、という根源性を強く訴える。

あらゆる場所であらゆる人へ

本作品群は少人数編成である「注文の多い料理店」をはじめとして、身体や音楽といった言葉に頼らない表現法を多用し、喜劇的要素も多く含むことで、国内外のあらゆる場所で公演が可能な作品として制作された。これまで劇場(80名規模から800名規模まで)や野外会場、イベント会場など、様々な場所での上演を行っている。海外での公演も多く、身体や空間・時間という総合的な立体空間を用いて感覚にダイレクトに訴えかける舞台作品として、各地で好評を得ている。

宮沢賢治シリーズ

注文の多い料理店、銀河鉄道、風の又三郎

小池博史はいま、おのれの野生に無自覚である人間に向けて、宮沢賢治の「注文の多い料理店」を、闇を照らす「うすあかり」として放ったのだ。そこに意味は存在しない。良い悪いではない。

ダンスはことばを越えたものであるから、この残酷さも、強さも、平然とわたしたちの裡なる場所へ踏み込んでくるのだ。ひかりの素足をもつ者として……。

—田口ランディ氏(注文の多い料理店「感想」)



パパ・タラフマラ作品

P a p a T a r a h u m a r a w o r k s



海の動物園
(1988)



パレード
(1989)



ブッシュ・オブ・ゴースツ
(1992)



青
(1994)



城〜マクベス
(1995)



船を見る〜SHIP IN A VIEW
(1997)



島〜ISLAND
(1997)



春昼〜はるひる
(1998)



WD -What have we Done?--
(2001)



Birds on Board
(2002)



未来の空隙は響き
(2002)



ストリート・オブ・クロコダイル計画2
(2004)



三人姉妹
(2005)



HEART of GOLD ~百年の孤独
(2006)



トウショウ台ブエノスアイレス書簡
(2007)



ガリバー&スウィフト〜作家ジョナサン・スウィフトの猫・料理法(2008)



パンク・ドンキホーテ
(2008)



パパ・タラフマラの白雪姫
(2010)

ネコの視点で描く作家の生涯
ガリバー&スウィフト

舞台美術にこだわり30年

エンターテインメント

30年常に新しさ探求

パパ・タラフマラ「三人姉妹」

閉塞と内向化への異議申し立て

Danc

WORKSHOP

小池のワークショップは25年間に渡り、25カ国で実施し大きな反響を呼んできました。海外ではほぼプロフェッショナル相手、国内では子供から老人、障害者、アマ、セミプロ、プロの隔てなく実施しています。長い時は2週間以上、短ければ3時間程度ですが、必ず作品化します。もっとも一般的な期間は1日当たり平均4～5時間、3日間を使って40分程度の作品にしています。

小池のワークショップの特徴は「全感覚を鋭敏にさせること」。私たちの日常生活は感覚を鈍麻させる方向に向かわせます。もっとも身近にあるはずの自然的身体を忘れてしまうからで、その身体感覚を取り戻しながら表現行為とし、身体がとても豊かな可能性を持ったメディアだと認識してもらうのです。

中心となる動きは日常の100分の1程度のスピードで動くこと。日常的スピードの動きや速い動きもありますが、極端に遅い動きの中にいかに多くの発見があるかを知ってもらいます。日常の何気ない動きでも、極端な遅さは個々人のからだを驚くほど敏感に、かつ劇的にし、その内側にさまざまな記憶を蘇らせます。たとえば指先でハンカチを持ち上げようと指が布に触れただけで大きく感覚が変わり、大切なものに見えてくる、手を上げれば心の奥深くに眠る記憶と一体化して激しく感情が揺さぶられる……等。

本ワークショップはアーティストはもとより、一般の市民にとっても新たな扉をこじ開ける場となっています。



P.A.I. 舞台芸術の学校

小池は教育機関P.A.I.(舞台芸術の学校)を1994年に立ち上げ、以来長くその方法を生徒たちと実践してきました。卒業生はすでに150人にも達します。

小池の舞台には境界がありません。ジャンルはほとんど意味をなさないと考えるからですが、ほとんどの教育機関(に限らず劇場も行政もですが)はジャンルの考え方を採ってきました。舞踊、演劇、音楽、美術……ジャンル横断はないのが通常です。この境界を取り払った小さな教育機関がP.A.I.です。

P.A.I.は可能性を探る学校です。新たな方法をしがらみなく、果敢に攻め込んでいける人材を育てる場としています。人のからだは可能性に富んでおり、踊ること、語ること、歌うこと、呼吸すること、動かすこと……これらが一体化しているのが私たちのからだであり、宇宙体であるとの認識の下、新たな手法や新たな感覚を探りながら、実践の場としてきたのがP.A.I.です。



H i r o s h i
K o i k e
1 9 8 2

初めて小池さんに出会ったのは、1980年代の初め、思えば今から40年近くも前のこと、僕が19歳の時だった。当時、小池さんが住んでいたのは、東京の西、国立駅から10分程の安アパートの2階。マイルス・デイヴィスやチャールズ・ミンガスが流れる薄暗い部屋で、いつも冷めたコーヒーを飲んでいて。今流行のモダンな古本屋に高値で並んでいそうな現代文学、映画や美術の本、レコードがギッシリ並んだ書棚を背に、劇団の後輩の話、その多くは自分で解決するしかない人生相談を、小池さんは微かな笑みを浮かべながら聞いていた。その部屋は、小池さんが大学時代に創設した劇団の溜まり場というより、心の拠り所のような場所だった。今より少しスリムだったヤング小池博史は、見様によっては革命家のチェ・ゲバラに似ており、個性派俳優でも立派に通用しそうな風貌だった。話す相手を真正面から見据えて、「結局、おまえは、何がしたいんだ」と口にするのではなく、穏やかな眼差しで黙って問いかけていた。でも、普段に話す言葉は茨城なまりで、そこに愛嬌があり、人間的な魅力があった。後輩からは「旦那!旦那!」と呼ばれ慕われていた小池さん。劇団の後輩からみれば、相談しやすい頼もしい兄貴であり、一時代を築いた伝説的な先輩でもあった。

この時から遡ること6年前、小池さんは大学の学園祭で公演した芝居が大当たりし、学生劇団を立ち上げた。イタリアの映画監督フェデリコ・フェリーニの祝祭空間を創り上げ、観客の熱狂的な支持を獲得したと聞く。京都大学の西部講堂などで公演を行なった逸話をもつ大学演劇界のレジェンドだった。遅れて入学した僕は大学時代のそれら芝居は見えていない。学生演劇とは思えないほど、パワフルで活気に満ちた舞台だったと言う。

ちなみに、小池さんが創作を触発された作品が「フェリーニのアマルコルド」だ。かの淀川長治が“世界一の映像美”と絶賛した傑作だ。映画後半に、村人たちが小舟で沖へ沖へと漕ぎ出すシーンが、後の小池作品に影響を及ぼしているのは、小池ファンには良く知られている。真っ暗な夜の海、皆が漕ぎ疲れて寝息を立て眠ってしまうと、汽笛を鳴らしながら巨大な豪華客船が出現する。村人は一生懸命に手を振り、余りの美しさに若い女性が感動の余り泣いてしまう。小池作品の重要なモチーフである“闇の中から現れる船、それを迎える人々の熱狂的な高揚、また、去って行った後の“透明な寂寥感”など、小池さん自身が思い描く故郷の風景と相通じる世界観が表現されている。同監督の「甘い生活」のラストシーン、マルチェロと少女の関係性にも小池さんの作品と同質の清々しい寂寥感が漂っている。

大学卒業後、小池さんはテレビ制作の仕事に就いていた。時は80年代初め、まさにテレビ黄金期、TVディレクターは憧れの職種だった。小池さんは、わずか入社半年でディレクターに昇格、世界を相手にしたドキュメンタリーを制作する新進気鋭のディレクターだった。

5月のある日、小池さんはスッパリ会社を辞めてきた。世間から見ればクリエイティブな上、高いサラリーがもらえる安定した仕事を、いとも簡単に投げ捨てたのだった。そして、誰も創ったことのない舞台を目指して、ひとり演出家として立つことを決めていた。小池博史が常人にあらざる所以は、周囲に一切の迷いを見せず決断し、これと決めたら全く揺るがないように振舞えることだ。

5人余りのメンバーが集まると、さっそく小池さんから、合宿も兼ねて富山で初めて行われた「国際演劇祭・利賀フェスティバル」に行ってみようという提案があった。当時の小池さんの愛車は赤いホンダのオートバイで、その影響から後輩の間でも単車が流行っていた。自然な話の流れで、皆でバイクを駆って東京から富山まで行くことになった。

7月下旬、大雨が降りしきる中、高速に乗らず下道で幾つもの峠を越えて400km以上先の利賀村をめざした。小池さんは激しい雨に打たれながら、絶えず後ろから走ってくる仲間を気遣い走ってくれた。「黙って俺に付いてこい」と上から命令するのではなく、「おまえがやりたいように走ってみろ!」と発破をかけながら、陰に日向に相手を見守り、集団を率いていくタイプのリーダーが小池さんだった。雨脚が強くて前方が見えないような嵐の峠で、なかなか追い付かない原付バイクの後輩をジッと待っている小池さんの姿を、今も鮮明に記憶している。

利賀村に着くと、廃校のような場所で自炊し寝泊まりしながら、朝夕に練習に打ち込み、その合間に演劇祭に通った。SCOTの鈴木忠志氏が実現させた日本初の先進的国際演劇祭では、国内外から招聘された当代一流の作品が上演されていた。それらはまさに、世界最先端の舞台だった。SCOT、天井桟敷、転形劇場等の日本の劇団はもとより、メレディス・モンクの原始的でラジカルな声が創り出す、重厚でモダンな世界も新鮮だった。そして何と言っても小池作品に影響を及ぼしたと思われるのが、“20世紀演劇の巨匠”タデウシュ・カントールによって上演された「死の教室」だった。小学校の教室を舞台に、子供の人形を背負った老人が繰り広げる群像劇だ。カントールは舞台上で指揮者のような役を務め、死の世界から蘇った人々からユダヤ人が負った歴史を引き出していく。音楽が奏でるタイミングを意識した行進の演出や、役者が舞台に出ずっぱりである点、ストーリーに頼るのではなくシーン毎の構成で描いていく演出術は、小池作品にも共通した特徴だ。これは想像でしかないが、若き小池博史は、世界の演劇界に革新的な変化をもたらしたカントールを正統に受け継ぐ流れの中で、自分の舞台を創りたいと思ったのではないか。

その後、小池作品は、日本の演劇等舞台芸術の系譜から明らかに逸脱した独自の道を歩き始める。戯曲など狭い意味での文学に依存する芝居ではなく、欧米で少しずつ認知されるようになっていた「総合芸術としての舞台」だ。現代演劇のみならず、ダンス、映像、音楽などの境界を軽々と越えていく舞台は、時に「動く現代アート」、時に「目に見える音楽」とも評されていた。翻って、アジアやラテンなど異文化が育んだ神話や歴史、芸能も積極的に取り入れていく。息の合ったアンサンブルが織りなす構図を重視した舞台、そこから、死と裏腹のエロティシズムや変幻自在で混沌としたカオスへ、そして、戦争、核がもたらすカタストロフな終末へ。新たな舞台言語や身体表現の獲得をめざすことで、そのウイングを広げると同時に、人類が抱える普遍的なテーマに還元させた。そして、40年後の今、空間的広がりも、限りない時間の超越も、何より躍動する身体の内面を、自らの思想とともに獲得し、小池博史は、唯一無二の世界を構築し続けている。

余談だが、日本の舞台は、新劇、商業演劇、小劇場などに加えて歌舞伎、能などの伝統芸能、オペラ、ダンス、バレエ、舞踏など細分化され仲良く棲み分けているのが現状だ。小池さんの舞台は、どの分野にも属しないとされるため、国内の新聞や雑誌に劇評が載ることは少ない。海外公演の多い小池さんは、世界の演劇シーンに最も詳しい日本人の一人だと思うが、小池さんに教を乞う評論家や記者はどれほどいるだろう。

1982年8月中旬、利賀村での演劇祭が終わると小池さんが主宰する劇団のメンバーは、それぞれの思いを抱き、帰京への途についた。タラフマラでの第1作となる「壊れもののために」の開演は、もう1か月余りに迫っていた。「壊れもののために」というタイトル自体、その後の小池さんの軌跡をなぞるようなタイトルであった。破壊と愛惜と、その地点から先を生み出そうとする小池さんの意気込みを僕は肌で感じていた。

Text:

白石章治 (NHKチーフプロデューサー)

「にっぽん百名山」「グレートサミット」など国内外の山岳番組を多数制作。「NHKスペシャル 夫婦で挑んだ白夜の大岩壁〜登山家・山野井夫妻〜」で第34回放送文化基金賞テレビドキュメンタリー部門本賞を受賞。パパ・タラフマラ設立メンバー。



ロンググッドバイ パパ・タラフマラとその時代

青幻舎刊 2,300円(税抜)2011年

「パパ・タラフマラ」が解散を決断したのは2011.3.11の天災、人災が起きたためだが、その決断を下すに至った社会的、文化的背景をさまざまな識者による論考やインタビュー、対話で構成している。小池は解散により舞台芸術の未来、身体表現の可能性、そして何を今後の社会に託そうとしたのか——
同カンパニーが辿ってきた30年の軌跡を追うと共に、日本社会における表現のあり方にも向き合っている。ファンを魅了して止まない美術性の高い舞台写真やポスター群、年表等までを掲載した。

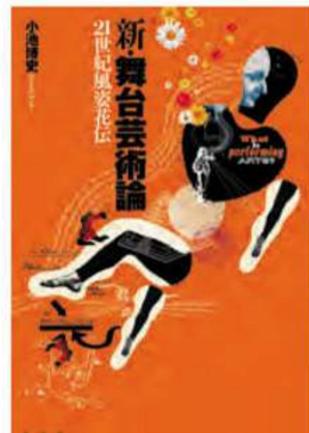


からだのこえをきく

新潮社刊 1,700円(税抜)2013年

現代、とりわけ3.11以降、蔓延する末期的な諸情況に強い警鐘を鳴らし、現在が抱え込んだ諸問題の根源を解き明かす。心と肉体が一体となった身体はなぜ失われていったか？ コミュニケーションが希薄化する社会が映し出す身体不在の病理。舞台芸術家として身体表現の極限を追求してきた小池が、「自然」と向き合うべき人間のあり方について提示し、生存の根本である総合感覚器官としての身体の力について、根源的な強さを引き出し、回復させることを希求した一冊

●『からだのこえをきく』を読んで、小池さんが闘っているものの対象がなんなのか、はっきりと見えた気がする。『からだのこえをきく』は、小池博史という舞台芸術家の「わが闘争」である。そして、その闘争は、多くの読者の心に響くことだろう。——茂木健一郎(脳科学者、作家)



新・舞台芸術論—21世紀風姿花伝

水声社刊 2,500円(税抜)2017年

演劇論でも舞踊論でもなく、世界的に類を見ない舞台芸術そのものに焦点を当てた全く新しい舞台芸術論。舞台芸術とはなにか、「空間」「時間」「身体」という根源的要素を軸としながら、その根幹を紐解き、総合的舞台芸術について問う現代の「風姿花伝」。1982年より独自の手法で次々と作品を制作し続け、国内はもとより、世界40カ国で高い知名度を得てきた小池の思いが詰まっている。

●表現者としての根源的孤独をひき受け、空間の豊饒な声を聴き、時間をダイナミックに彫琢する小池博史。本書には、演劇でもダンスでも音楽でもない、「舞台芸術」と名づけるほかにない統合的な身体芸術への道を独自に歩んできた演出家の、35年におよぶ探究の成果が詰まっている。過剰に言語化されてしまった現代社会の空白を衝いて新たな身体性の復権を宣言する、われらが時代の「風姿花伝」。——今福龍太(文化人類学者・批評家)



夜と言葉と世界の果てへの旅—小池博史作品集

水声社刊 2,800円(税抜)2018年

パパ・タラフマラ時代並びに、小池博史ブリッジプロジェクトになってから舞台作品制作のために書かれた各種テキスト、そのほか短い物語をまとめた作品集。厳選した15作品を収録している。観客は見る機会の少ない、舞台のラフスケッチに相当する部分ではあるが、美しく詩性溢れ、時に滑稽で、緻密かつ繊細に書かれた言葉の世界がそこにはある。表現された言葉という韻律が空間・時間・身体を呼び起こし、「これまで見たことのない舞台だ」と形容される小池の舞台作品を、手に触れながら感じることができる。

●色彩とイメージにあふれたことばの乱舞。聲が羽根をつけて変幻自在に踊りだす。小池舞台の魔術の秘法はここにあった!——今福龍太(文化人類学者・批評家)

●小池の舞台には、世界がどう変わろうとも人体は変わらない、という希望がある。その源がここにある。——葛西薫(アートディレクター)

C O N T A C T

株式会社サイ/小池博史ブリッジプロジェクト

〒165-0026 東京都中野区新井1-1-5 1F
TEL:03-3385-2066 / FAX:03-3319-3178 /
MAIL:sai@kikh.com

公式HP:<http://kikh.com>
Facebook:<https://www.facebook.com/kikhproject/>
Twitter:@kikhproject
Instagram:@kikhbridgeproject

●月に1回、メールマガジン配信中!
<http://kikh.com/special/magazine/mailmagazine.html>



主な事業内容

- 舞台公演、イベント企画制作業
- 人材育成事業 (舞台表現者養成スクールの運営、ワークショップ・セミナー・講演等の企画制作等)
- 空間演出業 (レセプション、パーティー、イベント等の空間演出)
- スタジオレンタル業

パレード 1989年

存在という時間に大きくかかわって来るのが、「もの」である。「もの」の群れの中で、あらゆるエネルギーと力学がイメージされ、視覚化された。パパ・タラフマラを一気に知らしめた作品。

城〜マクベス 1995年

パパ・タラフマラがマクベスを変える。ウィリアム・シェークスピアの「マクベス」を「亡霊が生み出した妄想の物語」として描く。豪華な衣装やスペクタクルな舞台装置は必見。

船を見る -Ship In A View- 1997年

故郷の、海辺の町を舞台に、様々な人間模様や風景が描かれる。小池が故郷をモチーフに制作。日本の風土を強く意識させる。世界中の一流劇場で公演し続けてきた作品。

ストーン・エイジ 1991年

石器時代の物語ではない。人間の原初的な問いかけを、太古から脈々と受け継いでいる文化の流れの中から描き出そうとした作品。巨大モニュメント的オブジェ群。

ブッシュ・オブ・ゴースツ 1992年

幽霊、亡霊、幻想の森、その場を巡って、揺れる人間の心象を探る旅を描く。大規模装置が林立。現在は過去へ、古代は未来へと繋がっていく。

青 1994年

「青」という色彩イメージのみから舞台化。壁、床、衣装…すべて青に彩られている。舞踊表現を本格的に模索した作品。

島 -Island- 1997年

翼があると思込んでいた老人と、妄想から分身の美少女を生み出してしまおう老女。舞台装置も何もない空間で二人のヴォイスが響き渡り、身体が交差する。パパ・タラフマラ史上、最もシンプルな二人舞台。

ストリート・オブ・クロコダイル計画2 2004年

20世紀前半にポーランドで書かれた二つの小説、「ストリート・オブ・クロコダイル」と「コスモス」。都市問題、戦争の影響、人の闇、様々な問題を孕みながら迷宮を巡る。パパタラ的幻想の街へようこそ!

HEART of GOLD ~百年の孤独 2005年

世界的ベストセラー小説「百年の孤独」にパパ・タラフマラが挑む!設立時からの念願が24年の時を経て実現した作品。小池の探求した舞台言語が網羅される。超現実的で、生々しく、ユーモラスな、ブエンディア一族百年史。

パパ・タラフマラの僕の青空 2006年

演出家小池博史自らが舞台に立ったパパ・タラフマラの異色作。女と男3人が織りなすミュージカル風迷宮コメディ!大人のロードムービーならぬロードプレイ。惜別の、情の、苦悩の、行く先にあるものは…。

トウキョウ☆ブエノスアイレス書簡 2007年

ブエノスアイレスの狂おしい喧騒と静寂に生きる女、クエスチオンだらけの生活。あっちの世界からこっちの世界へ、中川俊郎生バンドの美しく優しい音色と共に、ひとりの女の物語が浮かび上がる。

ガリバー&スウィフト

~作家ジョナサン・スウィフトの猫料理法 2005年

「ガリバー旅行記」を書いた、奇人作家ジョナサン・スウィフトの生涯に焦点を当てた本作。パパ・タラフマラがヤノベケンジのオブジェと共に、観る者を小人の国からパラレルワールドへ、魅惑の旅へと連れて行く。

バンク・ドンキホーテ 2009年

明るさと狂気を身に纏う家長バンドンが、家族を軍隊にして世直しを図る。その果てに見たものは…。総勢16名のパフォーマーとジブシーバンドがお届けする「パパタラのドン・キホーテ」悲しくも脆い、とある家族の物語。

パパ・タラフマラの白雪姫 2010年

童話シリーズ第3弾!愛らしい白雪姫と可笑な継母、変態王子に大きな小人たち。世界が逆転していく、不思議な森の神話的ストーリー。

●1本 3,100円(税抜) 14本セット37,000円(税抜)

●以下タイトル、アップリンクより発売中

WD -What have we done?- 2000年 5,600円(税抜)

20世紀。あれは何だったんだろう。あれは本当に終わったのか。ならば21世紀は、21世紀を超えられるのだろうか。私たちは何をしたのか。そして、私たちはどこへ行くのか。全4章からなるパパ・タラフマラ過去最大規模の作品。各章ごとに舞台美術・衣装を変えて繰り広げられる異例の超大作。

Birds on Board 2002年 4,700円(税抜)

「ハムレット」をモチーフに、不思議な船の上のカーニバルへ誘う。どこかで見たことあるような、閉鎖的空間で繰り広げられる歪んだ世界。可笑しくてちょっと残酷。狼狽で美しく、そしてゴージャスでエロティック。韓国気鋭の映像作家キム・ヨンジン、音楽家キム・テクンらが参加。

ラインナップはインターネットでご購入いただけます。
<http://pappa-tara.com/shop/>